

浜松市民が感動し、心震わせた出来事を振り返る当コーナー。

今回は浜松商業高校による春の

甲子園制覇(昭和53年)にスポットを当てました。

「甲子園で優勝した時のことは、断片的にしか覚えていません。ただ必死で、先輩たちに付いていったというのが実感です」

当時、浜商野球部の2年生部員としてベンチ入りし、内野手として2試合に出場した山田忠さん(現浜商野球部監督)の写真をこのように述懐します。

第50回選抜高校野球大会に出場した浜商は、早稲田実業(東京)、東北高校(宮城)、桐生高校(群馬)などの並み居る強豪、名門校を相次いで打ち破ります。そして迎えた福井商業高校(福井)との決勝戦。この日、甲子園のスタンドは5万8000人の大観衆で膨れ上がりました。

「この時、聞いた歓声は上から聞こえてくるというより、グラウンドから地鳴りのように響いてくる感じでした。それまでの試合とは全く雰囲気が違い、やはり決勝戦は別物だと思いましたね」。それでも浜商は重圧をはねのけ、福井商業に2



わが心の浜松

昭和53年

歓呼で迎えた紫紺の大優勝旗 浜商野球部、春の甲子園を制す

10で快勝。念願の全国制覇を果たしたのである。

翌日、浜松に凱旋した浜商野球部の選手たちは、新幹線のホームで思わぬ光景に遭遇します。それは、全国制覇を祝福しようと詰め掛け大勢の浜松市民の姿。

駅を出た選手たちは数台のオープンカーに分乗し、紫紺の大優勝旗を掲げての華々しいパレードに出発しました。

「パレードは、駅北口から鍛冶町通りを経て市役所前を通り、市体育館に至るコース。通りは歩行者

天国になっていて、ものすごい人だかりでしたね。道の両側のビルからは大量の紙吹雪が舞い、まるでニューヨーク・ヤンキースの優勝パレードみたい(笑)。あまりにも大勢の市民に車を取り囲まれたため、体育館に到着するまで1時間以上もかかりましたよ」

現在までに春夏通算17回の甲子園出場を誇り、今夏も県大会ベスト4に進出した浜商野球部。「今後さらに精進を重ねて、もう一度市民と感動を分かち合いたい」と山田さんは熱く語っています。



紫紺の大優勝旗を浜松にもたらした浜商野球部の選手たち